

P-370 炎症性リンパ節の術前 FDG-PET による評価

手塚 康裕・山本 真一・遠藤 哲哉・金井 義彦
大谷 真一・手塚 憲志・長谷川 剛・佐藤 幸夫
遠藤 俊輔・蘇原 泰則

自治医科大学 外科学講座 呼吸器外科部門

【目的】原発性肺癌に対する肺葉切除の際，手術手技上注意を要する局面の一つとして，炎症性リンパ節の肺動脈や気管支からの剥離操作が挙げられる．特に胸腔鏡下手術で肺動脈を損傷すると，安全に手術を遂行することが困難になる．そこで，術前 FDG-PET の所見で炎症性リンパ節の存在を予見することが可能か検討した．【方法】原発性肺癌で当科にて肺葉切除を施行し，炎症性リンパ節の剥離操作に難渋した 3 手術症例を提示．各々の術前 FDG-PET の検査結果を比較し，共通点や特徴的所見があるか否かを分析した．【結果】提示症例中 2 例の術前 FDG-PET にて，両側肺門部および縦隔リンパ節へびまん性の集積を認めた．いずれの症例も術前胸部 CT 上，有意なリンパ節腫大はなく，原発巣と比較しリンパ節への FDG 集積は軽度であった．残り 1 例は術前胸部 CT および手術所見上，病側肺門部に石灰化を伴うリンパ節が存在していたが，術前 FDG-PET では同部位への集積を認めなかった．【結論】炎症性リンパ節の存在を術前 FDG-PET の検査所見により予見できる可能性が示唆された．しかし，転移リンパ節との鑑別や，石灰化を伴うような陳旧性変化に対しては，今後更なる症例検討が必要と思われた．